

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 お待ちなせえ (上) 日本脱出編 ￥ 350

昭和44年4月20日 初版発行

昭和47年9月30日 13版発行

著 者 かじ やま とし ゆき
梶 山 季 之

東京都新宿区市谷仲之町38
季節社ビル

発行者 五十嵐勝彌

印刷者 磨田照雄

東京都文京区水道2-4-26

慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© TosiYuki Kaziyama 1969

お待^まちなせえ

(上) 日本脱出編

かじ やま とし ゆき
梶山季之



カッパ・ノベルス

お待ちなせえ
(上) 日本脱出編 目次

ある蒸発	5
東京の屋根の下	35
棚 たな からボタ餅 もち	65
画商たち	97
画廊・青い城	129
右往左往	159
ニセモノ	190
日本脱出	221

本文のイラスト

片岡真太郎^{かたおかしんたろう}

ある蒸発

(ええい、畜生！ いっそのこと、蒸発したるか！)

……五郎丸宗平は、書齋と自ら称している屋根裏の、納戸を改造した部屋にはいると、心の中で低くそうつぶやいた。一九六七年春のことである。

蒸発——手元の『広辞苑』をひいてみると、〈液体または固体が、その表面において気化する現象〉と説明されてある。

しかし宗平のいう「蒸発」とは、そんな科学的な現象ではない。当今流行の、亭主の家出のことなのである。

五郎丸宗平。大正十五年・丙寅の生まれ。つまり彼は数え年で、今年四十二歳の厄年を迎えたことになる。

大道の八卦見にいわせると、寅年生まれの間人は、なぜか気が強いのだそうであるが、宗平はいたって気が弱

い。

それというのも、子福者で知られた金久保家の六男に生まれ、愚直さを見込まれて五郎丸家に養子に來たからであらう。

昔の人は、〈小糠三合あれば養子に行くな〉と言った。これは名言である。

宗平は、本当に昔の人は、なかなかうまいことを言い残してくれた、と思っている。たとえ、〈夜目遠目傘のうち〉なんて文句があった。この文句など、宗平の心にいまだに灼きついて離れないのである。

なぜなら、宗平が五郎丸家から、

——一人娘のカネ子の婿に。

と交渉をうけたとき、宗平は二つ返事で承諾して、あとで愕然となった苦い経験があるからであった。

実は宗平は、五郎丸カネ子と、ある雨の夜、往來ですれ違ったことがあったのだ。そしてその時、宗平は早合点にも、

(ほう、美人じゃのう！)

と、思い込んだのである。

遊び人の兄の素平が、

「あんな女とはやめとけ」

と忠告してくれたのに、それを兄の素平がやきもちを焼いているのだ……と考えたくらいだからおめだたい。

金久保家を出て、五郎丸宗平となった日の翌朝——彼は、へ夜目遠目傘のうち——という金言の偉大さに気づくのだが、時すでに遅しであった。

古人も曰く、後悔先に立たず、と——。

なにしろ、夜目で見たうえに、カネ子は傘の内の人だったのだから、これはダブル・パンチもいいところで、泣くに泣けない。

五郎丸家は、F市で旅館を経営していた。だから、結婚披露など、お手のものである。

大勢の客を送りだしたあと、若夫婦は、ふだんは客用に使っている二階の座敷に通されて、初夜を迎えたのだった。

十二畳に次の間がついた、立派な座敷であつたが、生まれてはじめてそんな広い部屋で、しかも女性と二人きりになった宗平は、大いに照れくさく、あがつてしまつていた。

本当のことをいうと、婚礼の数日前まで、宗平は「童

貞」だったのである。つまりカネ子は、彼にとって二人目の女だったのだ。これでは、あがるのも道理であるう。

新郎の勤めを、真剣になつて果たそうとするのあまり、宗平はあせつてしまったが、このとき新婦は少しも騒がず、「だめな人ね」とつぶやいたのだから、すでに悲劇はここに胚胎していた……。

嘘か本当か知らないけれど、近ごろでは、童貞で結婚する男性が多くなつて来ているそうである。

赤線の灯が消えて、すでに久しいが、思えば「赤線」というのは、日本男性の修養道場であつた。この道場の門をくぐれば、男性は「筆おろし」ができたし、女体の神秘について飽くことなく学びとれたし、また時には不快な病気をいただいて試練の嵐に耐える……ということもできたのであつた。

が、今日ではその道場がないため、あたり宝の持ち腐れで、初夜に臨まねばならなくなったのであろう。

それはそれで同情するが、童貞男がふえた反面、バージンでない素人娘が激増しているという。ということでは、新郎が異性を知らないのに、新婦の方は経験者……

というケースが多いということであろう。

宗平の場合は、童貞ではなかった。

それは遊び人の素平が、弟がまだ女を知らないを知って、

「阿呆やなッ、こいつ！」

と、女郎買いに連れて行ってくれたからである。

相手の女郎は兄の馴染みで、二十五歳で童貞だという宗平の言葉を信用せず、大人として扱ったから、宗平の言葉を借りると、なんや知らんけど、あつというまに、筆おろしが終了したことになる。

農家の六男坊の彼にひきかえ、新妻のカネ子の方は、家の職業が旅館だけに、男女のそうした色事については、子供のころから十二分の知識を得ている。いわゆる「耳年増」の境地に達していたのだ。

だから、「だめな人」なんて台詞が、思わず口をついて出たのであろうけれど、しかし、その新婦の言葉は、宗平にとっては大ショックだった。しかも、初夜の床の中で台詞なのである。

まあ二度目の正直で、なんとか亭主の威厳を保てたけれど、そうなると新婦のカネ子は、バージンを売物にす

るのはこの時とばかり、大仰に逃げ回り、それを宗平は追いかけるという仕儀となった。

ぐったりして気づくと、二人は次の間の畳の上であった。宗平はよく先輩から、座敷を三回りしたかといううりな話を耳にしていたが、そんな現象が、実際に存在するのだということを、そのとき、教えられたのである。翌朝、眼を覚ますと、妻のカネ子は床の中にいなかった。

（どこへ行ったんだろう）

と階下へ降りてゆくと、番頭の喜兵衛が朝風呂をすすめてくれた。

湯殿の戸をあけると、女性の着物が乱籠にはいつている。待つのが礼儀だろうと、彼が廊下に行んで煙草を吸っていると、まもなく洗い髪の女性が、湯殿から出て来た。

宗平は、（泊まり客がいたのかしらん？）と考えながら、うやうやしく一礼したが、

「いい湯ですよ……」

という女性の声を耳にして、愕然となった。なぜなら、それは昨夜の女性——五郎丸カネ子の声音だったか

らである……。

「あのう……あなたは！」

思わず宗平はそう叫んでしまっていた。今にして考えれば、その一言を口走らなかつたならば、どんなによかつたろうと悔やんでいるのだが、口からもれたのは仕方ない。

だから妻のカネ子は、いまだに宗平のその時の台詞を根にもって、

「あなたは、自分の奥さんの顔でも、一晩で忘れるような人ですけん……」

と、折りに触れては、皮肉を言うのである。

しかし、宗平にいわせたら、見間違えるのが当然であつた。

厚化粧を落とし、素顔になつた彼女の顔は、

（これが美人だつたカネ子の顔やろか？）

と、半信半疑だつたほど、まるで別人のように見えたのである。

頬骨が突き出ているのは、まあ我慢するとしても、シミのようなすごい雀斑が化粧の下に隠れていたのは許せなかつた。これでは化粧ではなく、詐欺である。

高島田を結つた花嫁姿のときは、あれだけ、すらりと高く見えた鼻も、不意に陥没したのではないかと考えたぐらい、低くみえるのであつた。

おちよぼの受け口で、人形のようにだと思つた唇も、素顔では、二倍に裂けたような大きさであり、ぼつちりとしていた眼は、あにはからんや一重瞼で、糸のように細い……というのだから泣くに泣けない。

……これでは宗平が、彼女を見間違えたのも当然であろう。

しかし、当のカネ子は、宗平が粗忽者だから、湯から出て来た自分を、泊まり客と見間違えたのだ……と思ひ込んでゐる。

宗平としては、実は「女中」と見間違えたのであつて、まさか五郎丸旅館の一人娘だとは思えなかつたのであるが、それを告白すると大喧嘩になるから、じつと我慢している。

——夜目遠目傘のうち。

全く昔の人は、いい教訓を、簡略な言葉で言い残してくれている。そして、その教訓の立派なことは、五郎丸宗平が身をもつて証明しているのである。

宗平の実家は、F市郊外にある農家であった。

農地解放と、戦後の食糧難のおかげで、金久保家も小地主となり、家も新築したのであるが、子供のころの記憶では、金久保家は多少の田畑を持つ水呑み百姓でしかなかったようだ。十人の子供があつては、それこそ食うだけで精一杯であつたのであろう。

長男、三男、四男は支那事変と大東亜戦争で戦死し、復員した二男の地平が、病死した父のあとを嗣いで戸主となり、村会議員になつたところから、金久保家は少しづつ芽を吹いて来たともいえる。

二男の地平は、自らへ金久保家・中興の祖と称したが、宗平とは一回りも違うこの兄は、たしかに要領のよい人物だつた。第一、金儲けが上手なのである。

村会議員となつたのは、農業協同組合を牛耳るのが目的で、自分の家の〈供出米割当〉は人より少なく、〈肥料割当〉は人より多くもらうのが狙いだったといえは、地平の頭の抜群なことがわかるであらう。

弟の宗平に、五郎丸家からの縁談を持つて来たのは、この戸主の地平であり、それに反対したのは、五男の素平ただ一人にすぎなかつた……。

昭和二十五年という年は、日本にとつても宗平にとつても、意義ぶかい年であつた。

なぜなら、この年の六月末に、時の首相がいみじくも、「神風である」と放言した朝鮮動乱が起き、それまで沈滞しきつていた日本経済が、いっせいに上向いたし宗平は宗平で、婿養子ながらF市では五本の指にはいる〈五郎丸旅館〉の若主人となり、妻帯したからである……。

要領のよい兄の地平と違って、なにごとにも地味な宗平は、復員すると翌日から鋤を握つて百姓仕事に精をだした。

百姓が、自分の天職なのだと、思い込んでいたからである。

事実、宗平は「土いじり」が好きであつた。

鋤を黒くよく肥えた畑の土に打ち込む。ざっくりと黒い土が返る。鋤の背を使って、土の塊りを叩きほぐす……。

その瞬間、息を一杯に吸い込むと、土の匂いが肺腑にしみ込むのだ。

色気づいた村の青年たちが嫌がる「下肥運び」も、宗

平にはいっこうに苦にならなかった。

ただ下肥を汲み取るとき、姉や妹の生理の残骸を、発見することぐらいが憂鬱だっただけである。

畑好きを見込まれて、農業学校へ通わされたが、すぐ戦争となり、動員でK市の造船所で働かされているときに、いつのまにか卒業の免状をもらっていた。

そして、そのままひきつづいて徴用工として働くうちに、召集令状が来て軍隊に入隊。終戦は鳥根県の浜田というところで迎えたが、隊長の当番兵をしていたので、復員したのは翌年一月半ばである。

要領のいい兵隊は、軍隊毛布で大きなリュックサックを縫い、砂糖や米や乾麺を、しこたま持って復員して行ったのに、愚直な宗平は復員の時、なに一つ持って帰れなかったというのだからばからしい。

「阿呆やな！ 戦争は終わったんじゃ。上官もヘチマもあるかい。さっさと逃げて帰りゃア、ええものを……」
と、二男の地平は、手ぶらで帰った宗平を叱ったが、昔からそんな要領のわるい男でもあったのだ……。

復員の翌日から、宗平は戸主となった地平の、まるで“作男”のようによく働いた。

地平が、村会議員選挙に打って出て、当選してからというものは、それこそ朝に星をいただいて家を出、夜、月影を踏んで帰る……という有様であった。

すぐ上の兄の素平は、土地をもらって分家し、機械類にくわしいので、発動機を買い込んで春と秋の刈り入れ時には、“脱穀屋”として稼ぎ、代金は麦や米でもらって、ちゃっかり儲けていた。むろん、妻をすでに迎えていたが、畑は妻まかせで、本人はめったに鋤を握らなかった。

だから宗平は、金久保家の田畑の一切を、ひとりで面倒みていたことになる。

その働き者で、実直な人柄を、兄の地平は五郎丸家に吹聴し、一人娘のカネ子の婿に推薦したのであった。

だが、畑仕事しかできない、あとはせいぜい動員で覚えた旋盤が動かせるぐらいの宗平にとって、いわゆる“客商売”への転向というのは、百八十度以上の転換であったのである。

まるっきり新しい世界だった。

昔からの馴染み客の、顔と名前を覚えるだけならまだしも、その客の好きな肴、嫌いな料理、はては酒の燗の

加減から酒癖まで、全部そらんじなければならぬのだから辛い。それが先々代から、『お客様控え帳』として伝わっているものであった。

たとえば、先代のF市の市長の項を引用してみると、次のようになる。

「芦川仁兵衛さま。アツサリ。せっかち。浅蜷の味噌汁、冷奴、刺身好む。歯あしき方。肉、湯葉、南京豆嫌い。熱の方。女癖わるし。芸者メ香、よし葉、かな子、一太郎、市丸。果物は種とる。追放、要注意」

これを翻訳すると、次のようになる。

前市長の芦川仁兵衛は、どちらかといえば脂っこくない、あっさりした料理を好む。

しかし、せっかちな性格だから、座敷に通ったら、すぐオツマミなどの料理を運んだほうが喜ばれる。

料理の中でも、刺身、冷奴が好きで、御飯の時には、浅蜷の味噌汁は欠かせない。

歯がわるいので、肉類の料理は避ける。大嫌いな物は、京の湯葉、それに南京豆のオツマミである。

酒は熱燗のほうを好む。

女癖はあまりよくない。ひいきの芸者はメ香、よし

葉、かな子、一太郎、市丸などであるが、傍点を付したメ香、一太郎、市丸の三人とは肉体関係がある。

デザートの果物は、種子をとってだすこと。つまり西瓜なら短冊に、りんご、梨、柿などは四つ切りにして、いずれも種子をとってから出せ。

最後の「追放、要注意」という朱筆の文字は、終戦後に書き加えられたもので、市長ではなくなったし、貸し倒れとなる懼れがあるから、心して客に迎えよ……という戒めであった。

……宗平は、養子入りして約二年間は、この『お客様控え帳』を、折りがあれば眺めつづけていた。そうしてその客の特徴、癖などを、丸暗記してしまったものだ……。

これは並々ならぬ努力であるが、それにもまして宗平が心をくだいたのは、旅館経営のコツをつかむことである。

いうなれば旅館とは、蜘蛛の巣みたいなものであった。

網を張り、ただ客を待ち構えているだけなのである。

しかし、それだけではだめだから、いろいろな工夫を

要するのだった。

たとえば、料理の問題がある。

これはほとんど板前いたまえまかせだが、魚河岸うおがしから仕入れるのと、漁師と特別契約を結んで、直接に購入するのとでは、第一に値段も違うし、魚のイキが違ってくる。

また客によって、味加減が違ふのだった。これも一応は吟味しておかねばならない。

それから皿小鉢こぼち、女中の礼儀作法……といったようなことも、客にとっては大切な要素となる。

……とにかく、料理一つとってみても、そんな陰の努力がいろいろあつた。まして、旅館全体の「経営」ということになる、大変なのであつた。

早い話が、口下手くちへたな宗平は、旅館にはいつて来たお客に向かつて、十日間ぐらい、

「いらっしやいませ」

と挨拶することができなかった。

ただ頭を下げるだけだから、常連の客のなかには、「カネちゃんのお嬢さんいゝのは、聲うしろ啞者しやかいね？」と真顔できく者もいたほどである。

ご存じのように、畑仕事というのは、一人っきりで

きる孤独な作業であつた。しかし、旅館稼業かぎようとなると、そうはいかない。

客が相手なのだ。サービスを売る商売なのである。

それにお客というのは、牛馬と違って、人間という感情の動物であつた。些細ささいなことにでも、すぐカーッとなつたり、むくれたりする動物なのだ。この感情動物が相手だけに、商売がむずかしい。

おまけに、お客には、いふなれば「消費者は王様」という気持がある。

嫌なら次から来て泊まってやらんぞ、お前の所だけが宿屋じゃあるまいし……という露骨な態度を示すお客も少なくないのだ。

そんなお客の応対だけでも氣苦労なのに、先代からいる旅館の「主」のような番頭の喜兵衛や、女中頭のお玉という「小姑ここ」めいた存在があるし、さらに姑のヤス、家つき娘のカネ子……と数え立ててくると、まったく宗平は、なんのために養子に來たのかと、最初の二、三年は、悔やまれてならなかったことである。

宗平がおそらく愚直で、辛抱づよい性格でなかったならば、その苦難には耐えきれなかったであろうと思われ

る。兄の素平などだったら、一カ月で飛び出していたに違いない。

妻のカネ子は、彼より一つ年上で、丑年生まれだった。年上で、しかも不器量と来ているのだから、美人だと思い込んでいた宗平の軽率さは、結婚生活の出発点において、すでに大きな誤算を招いてしまっていたことになる。

余談だが、宗平はなかなかの好男子であった。

最近では、角刈りの髪にも白いものが混じり、頭頂はいささか禿げかかって来たし、前歯が二本欠けているので、その好男子ぶりも減点しなければならぬが、二十代の彼は、見合写真をみてカネ子が二つ返事をしたほどの、色男であったのである。

宗平が、羽織袴に威儀を正して、婚礼客などを迎える姿は、

「まるで役者のようやね……」

と、よく娘っ子から言われたものだ。

もっとも姑のヤスに言わせると、

「あれで弁が立ちゃア、申し分ないのにのう」
ということであったが。

正直に言って、婿になって二、三年のあいだは、本当に苦しかった。

食糧事情がわるい——というほどでもなかったが、派手な宴会は睨まれていた当時である。しかし、商売だから、頼まれればいやとはいえない。

番頭の喜兵衛に従って、日本酒やビールを工面して歩いたり、実家からヤミ米を買ってコソ泥のように運ぶ……というような苦労も舐めた宗平ではあった。

五郎丸宗平は、とにかく三年間で旅館経営というものをマスターした。

ちょうど朝鮮動乱ブームにぶつかり、景気が上向いて来たことも、彼には幸いしたのであるが、とにかく姑のヤスのご満悦で、

「これでどうやら御先祖様に、顔向けができる……」

と、あたかも養子の宗平が、「福の神」でもあるような扱いぶりであった。

だが昭和二十九年——宗平が入り婿してから四年目に、例の金融引き締め政策によるデフレが訪れると、F市のように観光資源に依存している中都市はひとたまりもなく、不景気に見舞われる。

宗平も、五郎丸旅館の当主として、なんとかしなければならぬ……と思うのであるが、数え年三十歳の頭脳と才覚とでは、いかんともしがたかった。

姑のヤスは、掌たなごころを返したごとく、

「こう、お客が来んのは、日ごろの信心が悪かと思やうか。それとも私が、駅前に客引きにでも、行って来やんしょうかのう……」

などと、皮肉めいた台詞せりふを吐いたものだ。

宗平は、日本旅館の経営というものが、今後はますます苦しくなるだろう……という見通しを立てていた。

そういう意味では、宗平は一個の先覚者だといえる。なぜ彼は、絶望したのだったか。

理由は、いろいろある。

たとえば料理などの材料費の値上がりも、その一つだった。

宿泊料金は、旅館組合の規定によって定められている。しかも一泊二食つきの値段であった。

昭和三十年の当時、せいぜい宿泊料金は千二百円ぐらいたったと記憶しているが、そのなかで朝夕の食事を賄まかなって、利益を出そうとすると大変であった。

朝食には、味噌汁、香の物、焼海苔やゐりに生卵ぐらいは出さねばならない。しかし、それだけでは、サービスが悪いと思われるので、魚の干物ほものか、佃煮つくねなどを添える。

団体客なら数をこなすので、ぐっと原価は低くなるが、小人数の場合には、逆に高いものにつくのだった。

夕食にしてもそうだ。

客はだんだん贅沢ぜいたくになり、そのうえ、西洋かぶれして日本料理より西洋料理を好むようになっていく。

昔のように、刺身、焼魚、吸物……なんてコースは、とくに若い人たちには嫌われるのである。そこで、限られた予算の中で、いろいろと趣向を凝らさねばならなくなる。

玉子焼よりはハム・エッグか、オムレツを出す。焼魚よりは、ピフテキをつくる。酢すの物よりは野菜サラダを添える……といった按配あんばいである。

この涙ぐましい努力をして、原価計算してみると、かならず予算オーバーになっているのだから嫌になる。

さらに宗平の頭を悩ましたのは、人件費の問題なのである。

人件費は、年々あがる一方であった。

たとえば女中の給料である。

悲しいことに、日本旅館と女中とは、切っても切れぬ関係にあるのであった……。

考えてみれば、日本式の旅館というのは、つくづくと損をするようにできている。

これがホテルなら、部屋の掃除をして、ベッドのシーツを取り替えるだけなら、一人で幾部屋も担当できる。食事だって、食堂へどうぞ——といえは済むのである。

だが、日本旅館では、客の寝た布団を毎朝いちいち上げて始末し、夜にはまた敷かねばならない。この労力だけでも大変であつた。

さらに食事は、一人前ずつ調理場から、廊下や階段を通じて、運ばなければならないのであつた。

それに掃除だって、まず雨戸を繰り、窓をあけ放ち、はたきと箒はらを使い、雑巾ぞうきんがけのあと廊下の艶拭つやふき……である。

一事が万事、こんな調子であつた。

材料費、人件費の値上がりは避けられないとしたら、あと、どのような方法が残されているだろうか。

料理の材料は、サービス競争に追われている昨今、決

して落とすわけにゆかない。また、女中の数を減らすということも、団体客のある春から秋にかけては考えられなかった。

宗平は、

（なにかしなければならぬ）

と考えた。

そうして、いろいろ知恵をふりしぼっているうちに、自分が五郎丸旅館で華燭かしやくの典てんをあげたことを、はつと思ひ当たつたのである。

（そうや、結婚式場や！）

宗平はそう思った。

幸い宴会用の大広間はある。

ないのは、式用の設備だった。

F市では大体において、神社で神主の祝詞のりとを受け、近くの写真館で記念撮影し、それから披露宴にのぞむというのが、一般のしきたりである。

だが、雨や風のつよい日は、当事者はともかく、列席者には、いささか迷惑な嫌いがなくてもない。

そこで彼は、庭の一部を改造して、神式の結婚式場と写真館とを建設しよう……と意図したのであつた。